

学生が取り組んだ共助

— その活動報告 —

柳澤 智美

近年の日本は、所得格差が進んでいる。それは、単なる所得格差に留まらず、子供の教育格差や子供の貧困という深刻な問題をも引き起こすなど様々な問題とつながりを見せている。これらのことは、自助の努力だけでは補うことは出来ない。さらに、公助によって賄われるはずの所得再配分が機能的な問題を引き起こしており、租税や社会保障の在り方を根本的に見直す必要もある。このような状況の中、地域や市民の活動に注目が集まりつつある。その1つの考え方が、共助社会といえよう。

共助社会は、現代社会が直面している、「高齢化、少子化、コミュニティの変化、学力低下、日本経済の低迷」などの様々な問題を解決するかもしれない要素を多く含んでいる。共助社会とはなんであろうか。人が人を支え合う社会といえれば、偽善に聞えてくるかもしれない。情報化社会の進展、少子化、高齢化社会の到来など、これまでに経験したことのない社会の中で、私たちは活動をしていかななくてはならない。従来、人は一人では生きられないことを自覚しつつ、お互いに協力し支えあって、地域社会をつくってきた。町内会や、隣近所の付き合いがある中で、子どもを育て社会の中で生きてきたといえる。だが、高度経済成長期の経済効率最優先の流れの中で、生活基盤は大きく変化することとなった。何かあれば、公助という側面で行政に依存していたように思う。そして、成長・拡大を前提にした行政システムに無関心のまま依存してきたのではないであろうか。行政もまた、右肩上がりの経済成長によって税収が増加していることを前提として活動し、「行政サービス」を大いに拡大していった。「公共」の範囲を拡大し活躍の場を広げていったといえる。こうして「公共」は行政が中心として担うものだという考えが私たちの中で定着してしまっ

いたように思う。

今日の日本は、税収の増加が見込めず、国、県、自治体は財政的に厳しくなる一方である。これまでのような公共サービスすべてを行政中心で行うことなどはや不可能といえる。その現状においてもまだ、私たちは「公共」は行政が中心に行うべきといえるのであろうか。と同時に、生活スタイルの多様化、核家族化から個族への進展などの生活環境の変化に対応することが行政サービスでできるのであろうか。私たちは「新しい公共」サービスを模索しなくてはいけない時代にいる。これからの社会を考えるならば、「公共」という概念を問い直し、「新しい公共」の概念を構築する必要があるのだ。そして、その中軸にあるのが「共助」という考え方といえる。

行政は、市民との協働、団体や企業への委託等によって、これまで自らが担ってきた「公共」の範囲を縮小し、「新しい公共」空間の創出に努める民間雇用の増加を求めなくてはならない。そして、私たち市民は、これまでのように行政に対し依存的、批判的なだけでなく、「新しい公共」の担い手であるという自覚を持つ必要がある。もちろん、私たちにできることは、実際問題として、ごく限られたことしかできない。では、何ができるのであろうか？ 今回は、その問いと向かい合った学生たちの活動を紹介したい。

彼らの名前は「城西大学現代政策学部共助チーム」である。

2050年には1人で1人が支え合う時代になる。それは、まさに大学生の彼らが60歳を、ちょうど過ぎた時期である。必ず来るその時に備えてなんらかの活動をしなくてはならない。生きやすい社会、そんな社会はどんな社会なのであろうか。学生が見つけた、その答えが、県が提案している共助社会であった。今、埼

玉県は「日本一の共助県」つくりに向けて取り組んでいる。学生たちは、この共助社会とは何かを自らが考え取組み、そして、各自がその答えを見つけていったのである。

1. 概要

城西大学現代政策学部共助チームは、埼玉県が「日本一の共助県」つくりに向けて取り組む事業の一つに参加した。この取組は、2012年、埼玉県が県民にとって共助をより身近なものとするとともに、「共助の担い手であるNPO」への理解と活動の参加を促進するために、大学における共助の取組を実施し、大学生が、その取組の様子を対外的に発信することで広く県民に「共助」のイメージを周知することを目的としたものである。この活動期間は、2012年8月から2013年2月までであった。

2. チーム

城西大学現代政策学部共助チームは、大学における埼玉県NPO活動促進広報キャンペーン事業の公募を通して委託され受けることとなった。多くの学生が参加できるように、ゼミ単位の活動ではなく、チームとして結成したのである。

3. 目的

これから、安心して60歳を迎えることができるような環境・地域をつくっていくために、自分達が継続してできることを探すこと。また、FacebookなどのSNSを利用し共助に関する取組みを発信し、共助という取組の認知度を上げること。学生が、活動していく中で、解決したいテーマを打ち出していくこと。

4. メンバー（2012年度当時）

城西大学現代政策学部3年：
佐藤将仁、松本剛、岸本美希、久保尚人、永倉友樹、野澤直人、牧野宏輝、松葉丈、石井亜希子、中谷謙介、坂内拓哉、八木一磨、横田光太郎、野澤勇太、松



本由佳、安済真衣、金田祐紀、木元瑞穂、皆川寿博、小澤優太、長谷川真矢、田中汐里
城西大学現代政策学部1年：
滝田衣里、斎藤有伽里、近藤郁美、奥平香織、迫田綾佳

5. 問題解決に向けての仮説

彼らのテーマは「高齢化問題の解決」であった。高齢化問題といっても、考え方によって様々である。まだまだ数年どころか、数十年も先の話である。現実味を持つことは難しい。そこで、学生たちと下記の一文を読むこととなった。

「2050年までには、被扶養者数と労働年齢の成人数が肩を並べるだろう。過去を振り返っても、このような状況に直面した社会は存在しない。中位数年齢52.7歳まで上昇した日本は、世界史上最も高齢化の進んだ社会となるはずだ」この記事が学生たちの気持ちや思いや考え方を変化させていった。

学生にとって、経済的な困窮はあまり現実味が無い。2012年度の名目GDPは世界3位と言われ、その数字から考えると日本経済が今後、低成長となると話したところで受け入れがたいといえよう。多くの大学生は、さまざまな事情はあっても、大学の入学金を払い授業を受けることが出来る。仮に、名目GDPが世界17位になった世界を説明しても理解できるはずがない。世界的に発言力が弱り、世界から消費市場として目を向けられることがなく、多くの家電製品には日本語の説明書きがない。日本語はまるで一地域の方言のようになるそんな世界が想像できるであろうか。だ

が、数十年先に、そのような世界が来るかもしれないのだ。何故ならば、経済成長には必要な3要素がある。

経済成長率＝（1）労働の増加率＋（2）資本ストックの増加率＋（3）生産性の改善率

これらの（1）～（3）の3要素は経済成長に必要な不可欠である。この式によって示されることは、GDPの成長率は、（1）労働力がどれだけ増えたか（労働人口と労働時間で決まる）と、（2）経済活動に投入される資本がどれだけ増えたか（貯蓄率で決まる）と、（3）経済活動の効率を左右する技術水準の改善度合いという3つの要素で決まることを表している。

つまり、GDPの成長率は、経済活動に投入されたヒト（労働）とカネ（資本）の量を、いかにうまく活用するかという技術によって決まるといえるのだ。

日本は、今後、高齢化によって労働年齢が減少する。とすれば、経済成長に必要な3要素のうちの1つ労働力が激減していくのである。この議論をした後、当初の学生の議論は、どうすれば、高齢化社会を止められるかということに集中した。つまり、少子化を食い止めることを考えたのである。まずは、女性を対象とした問題提議を始めた。つまり

- ① 女性が働きやすい環境、
- ② 子供と家族を支える環境、
- ③ 女性に優しい福利厚生の見直し

を、テーマとして話し合った。学生たちは、共助という取組みを、女性を対象とした、共助活動に取組むことで、その答えを見つけられると考えることとなった。

6. 共助からの学び

共助とは自助でもなく公助でもない、お互いが助け合って進む社会をつくりあげていくことなのである。女性が働きやすい環境整備に、問題解決の糸口を見つけようとした彼らは、子供関連や女性が行う街作りなどのNPOに参加していった。NPO団体の活動に参加させて頂きながら、社会問題と向き合っていた。学童保育では、子供や家庭の抱えている問題と向き合った。まちづくりのNPOでは、必要なものを必要な人

に、責任を持って届ける大切さを学んだ。ある地域では、子供たちが学校に持っていく袋は親の手縫いでなくてはならない規則がある。だが、母親のいない家庭ではそれが難しい。そのような現状を把握し、買った袋ではなく手作りの手提げバッグを送る活動をしていた。情報発信のNPOでは、徐々にその団体の取組や、その目的意識に共感していった。何かを形で人に伝えること、更に、伝える方法を「伝える」ことの重要性を学んだ。例えば、地域を、より住みやすく魅力的にしようとする活動や自治会やNPOの活動が、身近で行われていたとしても、その情報が肝心の地域の方々に、なかなか伝わらないことがある。効果的な情報発信とはなにか、SNSの時代に生きている故に考えさせられた。

学生は、活動の中で、多くのシルバー層の方と話す貴重な機会を得た。NPOには若い世代が比較的少ない。多くはシルバー層なのだ。シルバー層の将来に対する思いを学ぶことによって、年齢とは、なんだろうという疑問を学生たちが持つようになっていった。シルバー層が労働年齢に該当しないからといって本当に、日本は経済的な低成長となるのだろうかという疑問であった。例え、労働年齢が多くても、ニートだったらどうなのか。自分たちがこのまま就職もできなくて働けなかったらどうなのか。現在、元気に活躍している、シルバー層の皆さんにむしろ自分達は支えられているのではないかという疑問を持つこととなったのである。

7. 結果

学生たちは、活動をしていく中で、自分たちの仮説が間違っているのではないかという疑問を持ち始めた。自分たちが、考えていた理想の社会は本当の理想の社会ではないことを知ることとなったのである。2050年には62歳前後となる彼らは、普通に考えれば、後3年くらいで退職になるであろう。本来なら、そこから第二の人生のスタートとなる。それは、いわゆる老後ということとなる。学生たちは、これが、本当に自分たちが望んだ将来の姿なのかということに改めて問い直した。つまり退職後の人生が、余生や老後という考え方、それ自体が間違った考え方ではないか

と思いはじめたのである。

彼らは、自分達が支えられるのではなく、支える側になれないのだろうかという考えにシフトして行くこととなった。自分たちが、「生涯、現役で働き続ける」、そんな社会こそが理想だと考えだした。それは、決して20代の頃と同じ仕事をするというのではない。その年齢や事情にあった無理のない範囲で、年金+αを得ることなのだ。そして、消費を根底から支えていくことなのだ。こうすれば、日本の労働力の減少と、それにもなう消費活動の減少は同時に急激な減少ではなく、おそらく緩やかなものとなるであろう。そして、さらに先のシルバー層すら減少し始める時期に、今から備えればいいのか。

公助には頼らず、自助だけのような世界でもなく、年齢に関係なく支えあう世界こそが理想ではないかと考えた。そして、学生たちは自分たちの新しい答えを見つけることとなる。自分たちが、60歳を過ぎた時点では、シルバー層が若者を支える社会を作ること、それが、学生たちが見つけた「共助社会」であった。彼らが目指した社会は、以下の4つである。

- ① 早い時期から、仕事以外にもう1つの自分の活動場所をつくる、
 - ② 自分の得意分野をつくり何かの形で活躍できる自分である、
 - ③ この思いを忘れないようにこれからも定期的に話し合いの場をつくる、
 - ④ シルバー層＝弱い立場・病弱な人たちというイメージを自分たちがシルバー層になったときに覆す（健康でいる）こと、
- であった。

今回、活動をしていく中で、自分達が成すべきことは、それほど大きなことではなく、これから、自分たちが65歳になるまでに何かを意識して準備していく本当に簡単な取り組みから始めればよいことに気が付かされた。一般的に現状を変化させるためには、インセンティブの変化かルールの変化が必要である。そこで、学生たちは、ルールを変えるということを考えた。つまり「高齢化＝労働人口の減少」ではなく、「高齢化＝日本の底支えの働き手＋消費の担い手」と考えたのである。

共助の取組は数カ月のものであったが、大学生が学

ぶ時間としては十分な時間であった。それは、自分たちこそが活気ある働き手として生涯過ごせる社会を作ることができると思ったからである。そして、自分達なりの理想の社会を探し、その結論を学生達自身によって探せたからである。高齢化社会は避けては通れない。むしろ食い止めようと思ってもとめられない現実なのだ。ならば、受け止めればよいと考えるように、考え方をシフトした学生達の若い発想こそが日本を支えるのかもしれない。労働力が低下するのではなく、単純労働や、地域活動に必要な労働をシルバー層によって確保されると考えてはどうであろうか。人口減少とともに経済力も低下していくであろう。だが、これから高齢化をむかえる若者の全てが現役世代として働いていたならば、少なくとも消費の落ち込みは急激なものにはならない。現実的でない、そんなことは夢物語だと言われるかもしれない。だが、今の大学生が65歳になったときに、自分たちが日本経済を支えていくから、大丈夫！と言えるような社会を想定できたら、ゆったりとした大人の社会が実現するのではないであろうか。

そのために、今の大学生が60歳近くになってから何が出来るか考えたのでは間に合わない。今からでも、自分の興味のある分野に参加していき、自分の第二のステージを常に意識して欲しいと思う。そして、そうすることが次の世代への贈り物となるはずである。今回の共助の取組で学生たちは、自分が地域で出来ることは何か、今できることは何か、自分にとって大切なものは何か、それぞれが見つめなおす貴重な機会を得たといえる。学生達とともに学んだ4カ月によって、大きな希望や夢を与えられた。

8. 活動報告

事業で行った広報活動の日付と内容

下記の日付、及び日時でFacebookに掲載し活動を周知した。

(1) Facebookに掲載日時

2/17/13 6:30 AM	2/5/13 11:07 PM	1/16/13 5:41 PM	12/28/12 1:14 AM	12/1/12 6:51 PM
2/17/13 6:25 AM	2/5/13 10:41 PM	1/11/13 7:00 PM	12/28/12 1:03 AM	12/1/12 6:46 PM
2/17/13 6:14 AM	2/5/13 10:29 PM	1/11/13 6:59 PM	12/28/12 12:59 AM	12/1/12 6:42 PM
2/17/13 6:12 AM	2/1/13 8:43 AM	1/11/13 6:57 PM	12/26/12 4:00 AM	12/1/12 6:37 PM
2/17/13 6:09 AM	1/26/13 10:55 PM	1/11/13 6:55 PM	12/13/12 11:38 AM	11/24/12 6:00 PM
2/17/13 6:06 AM	1/26/13 10:47 PM	1/11/13 6:53 PM	12/11/12 4:00 PM	11/24/12 5:55 PM
2/17/13 6:02 AM	1/26/13 10:37 PM	12/31/12 2:16 PM	12/11/12 2:33 AM	11/19/12 7:29 PM
2/13/13 7:10 PM	1/26/13 10:23 PM	12/31/12 3:43 AM	12/11/12 2:23 AM	11/19/12 7:25 PM
2/12/13 8:22 PM	1/21/13 1:13 AM	12/28/12 1:21 AM	12/11/12 2:19 AM	11/19/12 7:20 PM
2/6/13 10:38 PM	1/18/13 5:29 AM	12/28/12 1:18 AM	12/3/12 11:38 PM	

(2) 活動によるFacebook以外の広報活動。

- ①委託によって可能となった広報活動1(学生担当)
 - 2012年12月14日 坂戸市学童保育の会の講演
・・・共助とは
 - 2013年1月18日 ヒューマンサービスエンジョイの講演・・・共助とは※1
 - 2013年1月26日 キングス・ガーデンにて共助活動の説明※2
 - 2013年2月10日 共助名刺を就職活動の際、担当者や同年代の学生に配布※3
 - 2013年2月26日 城西大学水田記念美術館にて、共助の取組展示※4
 - ②委託によって可能となった広報活動2(教員担当)
 - 2012年11月9日 西入間あんしん市民後見人の会の講演・・・共助とは※5
 - 2013年2月25日 城西大学現代政策学部父母メールにて共助の取組配信※6
 - 2013年2月26日 大学HPに共助に取組んだ学生の紹介掲載※7
 - ③2013年2月 埼玉県のポスターに女子学生紹介※8
- ※1-8は、下記参照。

2013年1月18日 ヒューマンサービスエンジョイの講演・・・共助とは※1



代表の木下氏の講演風景

2013年1月26日 キングス・ガーデンにて共助活動の説明・・・※2



共助の取組について話した後、特別養護老人ホームの中にて活動。

2013年2月10日

共助名刺を就職活動の際、担当者や同年代の学生に配布※3



表面には氏名と大学名、裏面には共助と記載された名刺の作成。集団面接や、会社説明会などにて大活躍（作成者 田中汐里）。

共助も自分も印象付けることが出来るということで、就職活動を有利に展開することにも成功。

2013年2月26日

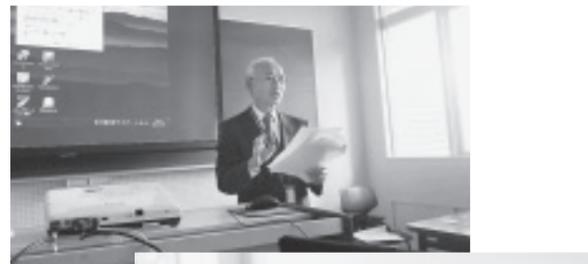
城西大学水田記念美術館にて、共助の取組展示※4

A1パネル9枚は、学生達の考えている内容や、調べたことなどの研究発表として使用。

A3パネル18枚でFacebookのページに掲載した記事を中心に、活動を紹介。

2012年11月9日

西入間あんしん市民後見人の会の講演・・・共助とは※5



市民後見人の立場から、共助とは何かを教えてくださいました。

2013年2月25日

城西大学現代政策学部父母メールにて共助の取組配信※6

全文

現代政策学部3年 野澤 直人

本事業を通じて実施してきた共助の取組の感想は、最初は共助の広報活動をして欲しいと言われても何をやるのかわからず、何をやるのだろうという疑問や、何の効果があるのだろうと疑問ばかりが先立ちました。しかし、やりはじめていくと共助という取組の1様性ではない多面的な部分の面白さや、実際に参加させてもらった埼玉情報センターの市民記者講座などが目指している取組というものに大変共感ができました。埼玉情報センターは、参加した人たちに地元の良いところを再発見してもらおうという取組や、その情報発信の方法を伝えていくことを使命としているNPO団体です。そこで聞いたのは、埼玉県は自分達の地元の良さを伝えるとか、自慢できるものは何かといわれるとあまり例が挙がらず困ることが多いということでした。実際、アンケートをした結果、郷土愛などが日本一低いというアンケート結果が出たということです。やはり、自分達の住んでいる街を好きになるからこそ、その地域の課題発見や、その地域でできないビジネスが発生するのだと感じることが出来ました。私は新潟県出身ですが、自分の地元の良さは語りつくせないほどあります。この講座に参加した人たちが埼玉の良いところをたくさん見つけて欲しいと思うとともに自分の地元でも良いところをどのように活かしていけるのか考えるようになりました。今回の取組を始める以前に大学の授業でNPOなどについて学び、助け合って生きていくということに興味を持っていましたが、特に積極的に何かに取り組もうとは思っていませんでした。ですが、今回の取組の中でNPOの方の話がたくさん聞いたり、実際にNPOの方々の行っている活動に参加していく中で今まで以上に共助というものに関心を持つとともに、改めて現代社会には共助が必要であると感じることができました。というのも、価値観が多様化していく中で共助の必要性がわかっていない人や、いまだに公助でやっていくべきだと考えている人が多いと感じるようになったからです。その人たちに自分達の置かれている立場をしっかりと理解してもらい、日本の現在の財政状況を考

えたら公助に多くの事は望めないということなどを理解してもらうことが必要だと思います。これから自分も、なぜ、今、共助が必要なのかを伝えていき、その人たちの価値観が少しでも変化していけば良いと思いました。また伝えていく、広めていく事は一時的ではなく継続して行っていかなければならないと思いました。

もうすぐ、私は4年になります。私たちが数十年後、「支えてもらう自分」ではなく、「支え合う」、もしくは逆に「支えることが出来る自分」になるためにはどうすべきか考えることが出来た取組でした。

このような機会を与えてくださった県の方に大変感謝しているとともに、この文章を読んでいただいた方に、少しでも共助というものに、興味や関心を持っていただければよいと思っています。

・参考URL : <http://www.josai.ac.jp/new/topics/temps/201303001.3>

2013年2月26日

大学HPに共助に取り組んだ学生の紹介掲載※7

・参考URL : <http://josaigendaijimu.blog.fc2.com/>



2013年2月、埼玉県のポスターに城西大学現代政策学部の女子学生が紹介されました。※8

(3) 活動のまとめ

城西大学現代政策学部共助チームの活動の特徴を以下の3点にまとめたい。

まず、支え合うことの大切さを知ること。学生は、用意された団体に行くのではなく、自分が興味のある団体を探して活動をしていった。教員が用意した場所や教員の研究しているテーマへの参加ではなく、自分が支えたいという思いを表現出来る団体を探ることか

ら始めた。



次に、自分が頑張るスタイルを取るのではなく、頑張っている人を応援するという姿勢を採用した。学生に教えられたことだが、多くの大学生は、あまりに頑張っている人、頑張り過ぎている人に対して反感を持つか、もしくは自分には関係ないと思ってしまう傾向にあるという。だが、頑張っている人を応援する人に反感を持つ人はいないとのことだった。この、着眼点を上手に利用することとした。今回は、学生が共助を学ぶ場であると同時に委託事業としての成果を出す必要がある。Facebookにおいて、多くの「いいね」を集めなくてはならない。であれば、反感をもたれてしまえば「いいね」の数は期待できない。そこで、頑張っている人を応援していたら、自分もいつのまにか引き込まれたというストーリーを活動の当初から念頭に置いて、表現方法に工夫をした。

彼らは、自分たちは共助という取組を知りたい、調べたいという思いを、自分の言葉で表現し話せるように努力していった。

以上3点の特徴を持ち、活動をすることによって多くの「いいね」を頂いた。最終的には埼玉アリーナでの発表の際は、299「いいね」を頂くことができた。多くの「いいね」の中で、学生の大変自信に満ちた発表を聞くことができた。そして、学生の提案もあり、

参加大学の中で、「いいね」の数を最も獲得し、「いいね」賞を受賞した。

最後に

学生の活動は、教員の研究の延長線にあるべきか、そうではないか迷うことが多々ある。もちろん、教員の研究の延長上であれば学生は、考えることや自分で実行することが半減し、言われたことを実行するだけでよい。社会貢献をしているつもりになって、そして、大いに達成感をもつことになる。だが、それが教育効果につながるものであろうかと迷うことが多い。学生には学生にしか見えない部分がある。今回の、共助の活動にしても、「頑張っていることがカッコ悪いと感じる」、「頑張っている人を見ると自分達はひいてしまうから…」という学生からの言葉は、とても新鮮に感じた。どちらかといえば、頑張っていることがカッコイイと言われて育ってきた世代が多いのではなかろうか。

ある一定の世代から、このような変化が起きているのだ。私たちは、学生のこうした変化を受け止めながら、学生達の活動を見守る必要があると感じた。そして、学生の活動は、多くの場合教員の研究の一部を手伝うことになりがちであるが、それでは共感を得ることは難しいということが今回の活動を通して判明した。学生の迷いながら、考えながら進む姿こそ、真の共感や感動を得ていくのである。

そして、教員ができることは、地域構造や人口構造などから、分析すれば今後の社会情勢がどのように変化していくかを予測し、どのような人材が必要になるか等の予測を学生に提示して何が必要か学生に考える機会を提供することである。そして、学生自身が考えて出した予測をもとに、現在からその年代までの自分自身を想像する能力を身につけてもらえたらと思う。学生自身が望む自分をコーディネートしていくことができる能力が身につけることが出来ればなお良い。つまり「現代を知り、先を予測する力を養う」ことといえる。その予測をもとに実行し、必要なことを遂行する能力を身に付けた学生こそが、現代政策学部の全ての学生に期待される学生像といえると感じた。

【参考文献】

- 恩田守雄、『共助の地域づくり―「公共社会学」の視点』出版社:学文社、2008/03
- 鷲尾悦也、『共助システムの構築』、明石書店、2009/07
- 岸真清、浅野清彦、立原繁、島和俊、『自助・共助・公助の経済政策』、東海大学出版会、2011/07